

空



2015・10

**SORA** 63号

粕屋 吉 田 葎

豊の秋巨大なものを鬼と呼び  
いなびかり大和島根は南北に  
禅僧の一語一語や椿の実  
鴟の声山より高く竹とんぼ  
山ひとつ陣跡として秋の雲

福岡 亀 井 紀 子

二階家を大きく使ひ蠅逃ぐる  
順々に日傘をたたむ忌日かな  
身の内に蜘蛛飼うてゐる女あり  
秋立つや固く結ひたる靴の紐  
弔ひは小石重ねて秋ざくら

糸田 宮 井 知 英

海底に上り坂あり油まじ  
海峡に船の混み合ふ芙美子の忌  
滝壺を離れし水のだらしなき  
手鏡の中にも詰まる鱚雲  
猪垣の内に納まる墓域かな

糸島 小 林 朱 夏

前掛けに西瓜を入れて戻りけり  
座布団に赤子を寝かす菊日和  
振り向けば手を振る母が酔芙蓉  
藁付けて伸びてきたりし曼珠沙華  
鳥威鳥の亡骸吊しけり

太宰府 山本 則男

敗戦日柩の底は畳敷き

流燈や声のとどかぬところまで

草市の風に浮きたつものばかり

先頭は風になりたる風の盆

子規庵の糸瓜揺らして帰りけり

福岡 山内 碧

牛を置く夏野の起伏果てしなく

螢袋ひとり遊びの子が覗く

昼寝せぬ子への絵本の先言はる

夏帯を締めたる母の他人めく

夏草や潮騒絶えぬ父祖の墓

福岡 田代 貞枝

鬼灯を買うてほほづき色の空

青簾一人の夕餉すぐに済む

長梅雨や遺影にこぼす独り言

送り火の消えてしばらく道を見る

盆過ぎの睡たき風となりけり

千葉 原友子

剥がさんとすれば吸ひつく汗のシャツ

夜の雲に深き谷あり稲びかり

掴まれて蟬電流を放ちけり

簞てふ大筒を展くかな

農小屋が恐し百足虫を見たるあと

須惠 苑 実 耶

あを空へ上りつめたる凌霄花

青楓堂守に茶を振るまはる

冷奴思ひ通りにならぬ夫

父と母加へし墓を洗ひけり

門までを送り草取る人となる

福岡 矢野 百合子

雲の峰掲げ横たふ阿蘇寝釈迦

祈られて地蔵となりし石涼し

葦原となりし故郷の川の音

ふるさとやひたすら歩く盆の道

白鷺のときに横向く水の秋

長崎 松尾 龍之介

熊蟬やむかし出女入り鉄砲

あざやかに袖山走る夏衣

手花火の名残りや橋の欄干に

蟋蟀やひつそりかんと台所

こぼれ行く道筋のあり芋の露

福岡 白 水 良子

立ち上る力は腕に涼新た

ぶだう棚修道院の真下まで

今年又納戸を出でず竹婦人

踏ん張つて滝のしぶきへ手を伸ばす

柘榴描く和紙の滲みや風通る

熊本 松田明子

軒ごとに玉葱吊し家郷かな

いただきの雲押し上げて梅雨あがる

山峡のあぐら涼しき羅漢像

名水を喇叭飲みして夏休み

吊橋のどこを歩くも炎天下

大阪 田岡千章

梅雨最中訃報回覧板至急

黴匂ふ初任給料明細書

草むしる気塞ぎの籬ゆるぶまで

雲の峰赤チン塗りし膝小僧

街薄暑地図を反転してなぞる

北海道 押田裕見子

彩雲の光に染まる瀧しぶき

中指になじむ指貫夜の秋

咲き急ぎ散り急ぎたる酔芙蓉

恥ぢらひを少し覚えて浴衣の子

子の触るる盆灯籠のよう回る

山梨 野畑さゆり

甲斐信濃わかつ峠や濃竜胆

園児らのラジオ体操秋高し

表札にのこる母の名鱒雲

家中に秋刀魚の匂ふ防災日

白桔梗亡き母の杖ゆづりうけ

京都 天谷翔子

須磨寺や草笛吹けば海まぶし  
白玉を食ぶ己が罪数へつつ  
新涼や旅の枕にハーブの香  
地下道の壁の落書野分かな  
謝つてばかりゐる母秋桜

福岡 山田正子

青みかんむく少年の日の匂ひ  
ひとつづつ退治するごと葡萄食ふ  
鶏頭花色褪せしことが付かず  
全集の金文字薄れ蝉しぐれ  
雁渡るいつもどこかで戦あり

新宮 井浦美佐子

つくつくし夕日まともに家並かな  
初産の窓を開けたる稲の花  
萩の風うしろ姿の待ちぬたる  
喪歸りの早も畑に蔓たぐり  
病室に香のほとぼしる青みかん

福岡 樋口みのぶ

振りかへる目の平らなり草取女  
医書繰りて眠気のきたる梅酒かな  
独り居に苦瓜熟れてしまひけり  
天上の父ははに会ふ昼寝かな  
墓に種こぼしてゐたる鶏頭花

福岡 あさなが捷

国宝の絵巻に火焰秋の雷

稲刈やおやつ届けしことなども

指先を包んでもらふ少し秋

柿紅葉夕日余さず受け止めて

林檎むく気づいてをらぬふりをして

福岡 栗原京子

水鉄砲隣の芝生まで逃げて

遊船に傘を大きく応へけり

ミニトマト転がしゲームのごとカラス

草いきれ亀の飛び込む水の音

整然とグラス伏せられ夏座敷

粕屋 秋 千 晴

いく度も庭師の上を巣鳥飛ぶ

巣籠りをレースカーテン越しに見る

巢に籠る鳥にゆつくり雨戸繰る

大雨に向きを替へては巢に籠る

台風一過烏の羽根の落ちてをり

兵庫 石川 叔子

水打つて香を濃くしたる庭の草

鳴きはじむどの木も蟬の木となりて

子午線の古りし標柱雲の峰

秋の蝉ローカル線の一人旅

蝸の声を遠くにひとり膳

福岡 吉村 撰 護

夕闇に風呼んで咲く烏瓜

東西の雷が打ち合ふ雲の中

夜の秋ゆるる「かな書き教へます」

雲すでに崩れてをりし今朝の秋

秋雨や小児科医院廃業す

東京 古川 夏子

遠雷や侯爵邸の大鏡

花小水葱雨は斜めに暮れゆけり

コスモスのライトに揺るる最終便

屋上の万葉小径昼の虫

天上に水音のあり青薄

大阪 青木 朋子

新盆や義母の手になる写経軸

自画像の義父は健やか盆灯籠

蟬穴があまた一茶の終の庭

下枝に槌る空蟬にはたづみ

揮毫句の格天井や蟬時雨

東京 今井 春生

姫君のごと林中の笹百合は

振り向けばピアスの揺れて星涼し

満月を赤く花火の揚がりけり

八月の真白き道をまつすぐに

梨の汁蟻の溺るるほどであり

東京 遠山のり子

虫食ひの数多あれども草茂る

うねる松大海染むる大西日

侘住まひ風鈴ばかりにぎやかに

湖に夕映えしばし秋桜



# 空作品評

柴田佐知子

秋天や拳の太き反戦歌

亀井 紀子

最近、法案に反対する若者たちの姿が報道されていたが、私は一九六〇年頃の安保闘争の抗議デモに参加した若者たちを思い出した。燃え上がる様な若者のエネルギーであった。〈拳の太き〉…かくも短く具体的な言葉である熱気が伝わってくることに驚く。見事な言葉の選択である。

遠嶺晴すでに傷もつ囃鮎

深川 淑枝

定型と季語から成る俳句という短い詩形において、季語は大きな力を持つてくる。見方を変えると季語の本意本質を知らなくては俳句の読みも浅くなる。作句と共に季語そのものとじっくり向き合う時間も大切にしたい。そこで掲句の季語に触れてみよう。

夏の季語〈囃鮎〉は、鮎の縄張り性を利用した友釣に使うための鮎。春に川を遡ってきた鮎は、流れの速い瀬にそれぞれ縄張りを持って棲むようになる。縄張りは一平方メートル、行動圏は三平方メートル程らしい。この範囲に他の鮎が入り込むと背鰭を立てて攻撃

して追い払う習性を利用して釣る方法が友釣り。囃鮎と釣糸を繋ぐために鼻環という円形の器具を鮎の鼻に付ける。更に鮎を引つ掛ける掛針とその掛針を安定させるために尾鰭付近に刺す逆針とを結んだ仕掛けを、先述の鼻環に結んで使用する。この囃鮎を使って竿を操り、縄張りに侵入させると、縄張りの主は囃鮎の尾鰭付近を狙って体当りをして攻撃してくる。この闘争的な習性を利用して掛針に掛かった鮎を釣るのである。囃鮎が弱っていると掛りが悪くなるそうだ。

溪谷での鮎釣りであろう。まだ仕掛けを身に付けていない囃鮎が準備されている。このあと鼻環や逆針が身を刺すのである。〈すでに傷持つ〉の措辞が心にしみる。

百万年前は原人木の實際る

原 友子

原人は人類進化の過程で猿人に次ぐ人類。百万年という途方もない時間があつさりと詠みこまれた面白さがある。作者ののびのびとしたスケールを感じる句。このように進化して複雑な時を生きているが、石器を手に直立歩行を始めた頃があつての今なのだ。一句の中に壮大な時空が収められているのだが、百万年を一気に遡り自分が原人になつたような気分になり可笑しい。

# 空集

## 柴田佐知子選



素つ気なき音風鈴を終ふとき

蚊遣火の灰がとぼとぼ後につき

脱ぎし衣おんぼろぼろや衣被

百万年前は原人木の実降る

新松子海はいちめん日のかげら

立ち眠る馬に晩夏の隠岐の海

夜も干す網の匂ひて虫しぐれ

遠嶺晴すでに傷もつ四跼

草に上げくちびる厚し梅雨鯨

跳箱にひらと開脚風青し

雲の峰懸垂の足地を離る

酔ひ少しまはりし盆の口説歌

下駄の音も囃しのひとつ躍りけり

放生の稚鯉しばらくかたまつて

子供相撲審判深く前かがみ

いくさなき山河すつくと曼珠沙華

足も手も喜ぶ赤子天高し

福岡 亀井紀子

福岡 永淵恵子

盆のもの胸の高さに抱へゆく

猪の檻より放つ大音声

仰ぎ見る星取表や秋日和

秋天や拳の太き反戦歌

すすき原ひかり隠るるところなし

無月かな家に帰らぬ少女たち

遠嶺見るとき秋耕の手を重ね

千葉 原友子

北九州 深川淑枝